

古市

江戸時代江戸の吉原、京の島原と並ぶ遊郭街
外宮と内宮の中間、街道沿いに妓楼、芝居小屋、
旅籠が軒を並べ「精進落とし」の場として賑わった。
最盛期には妓楼70件遊女1000人を越えたという。
古市三座と言われる芝居小屋が建ち「古市で
評判をとらなければ京、大阪の舞台は踏めない」
といわれたほど役者の登竜門の場であった。
古市は幕府非公認の遊郭で山田奉行も寛文9年
遊女追放令を出すが一層発展したという。
嘉永5年(1852)の大火以降衰退、戦災で消滅。

[弥次・喜多]

山田に入り、同郷の米屋太郎に会う
妙見町、藤屋に泊り、くつろぎ髪結い。
"あなどりしむくひは罰があたりまへ
ゆだんのならぬいせのかみゆひ"

妓楼千束屋で遊ぶ。

"むくつき客もこよひはもてるなり
名はふる市のおやまなれども"

神妙に内宮をお参り、
"引きすりていく代かあとをたれたもふ
御衣裳川のながれひさしき"

藤屋に戻り外宮参拝、腹痛騒動。奈良へ

伊勢参宮街道：09 小俣—外宮—古市—内宮



倭姫宮 (祭神 倭姫命)

命は垂仁天皇の皇女で豊鍬入媛の後を継いで
大御神の御杖代として大和、伊賀、近江、美濃を
巡幸し伊勢、五十鈴川辺に神宮を創建された。
宮は大正12年創建。近くに媛の御陵がある。

猿田彦神社・佐瑠女神社 祭神猿田彦命、ほか

天孫降臨のとき天宇受売命(佐瑠女命)と共に
道案内をする。"みちひらき神"として交通安全、
家業繁栄の信仰が篤い
天宇受売命は技芸、神楽、地鎮の神。
猿田彦の末裔太田命が倭姫をこの地に案内し
たという。

油屋・大林寺

寛政8年遊郭油屋にて医者孫福齋が茶汲み女
"おこん"をめぐる起した刃傷沙汰の騒動。
油屋騒動と言われ"伊勢音頭恋寝刃"の芝居
にもなった。寺に齋、おこんの墓がある。



寂照寺

徳川秀忠の姫天寿院(千姫)の位牌、遺物を
納め、追善供養のため延宝5年(1677)知恩院
の寂照知鑑が創建。廃寺寸前、安永3年(1774)
知恩院から月遷上人が派遣され画才を揮って救う。



外宮 (祭神 豊受大神宮)

雄略天皇22年の時天照大御神のお告げに
よって丹波の国(天橋立付近)から伊勢渡会
の山田が原を迎えた。(地付神との説も)
天照大御神の大御饌殿(お食事)の守護神。
神域内には荒御魂を祀る多賀宮、水害から
護る大土乃御神を祀る土宮。風雨を司る
級長津彦、級長戸辺命を祀る風宮がある。
正殿の鯉木:9本、千木:外削、蕃垣:なし
東西宝殿:正殿の前、御饌殿、外幣殿:板垣の内。

内宮 (祭神 天照大御神)

相殿東に天手力男神、西に万幡秋津姫命を祀る
日本書紀によると
天孫降臨の際、天照大御神は瓊瓊杵尊に三種
の神器を授け、八咫鏡について「この鏡をみること
我を視るが如くせよ」と仰せられ、同じ宮殿の中で
御神体として奉斎するよう命じたという。
歴代天皇がこの同床異殿が守られ、奉安されてきた
が10代崇神天皇のとき天皇が神と同居するのは
恐れ多いとし八咫鏡は皇居を出ることになり
皇女豊鍬入媛命を御杖代として大和笠縫邑にお祀
したが更に大宮地を求めて丹波、大和、紀伊など
巡ったが見つからず、11代垂仁天皇の皇女倭姫に
引き継がれ伊賀、近江、美濃を巡りついにこの地
五十鈴川の辺に鎮座されたという。
神域内に荒御魂を祭る荒祭宮と風雨を司る神を
祀る風日祈宮がある。
正殿の鯉木:10本、千木:内削、蕃垣:あり
東西宝殿:正殿の後、御饌殿なし、外幣殿:板垣の外。



慶光院は尼寺。室町時代120年間途絶えて
いた式年遷宮を復興させようと初代院主
守悦、3代清順、4代周養らが諸国巡歴し
勧進に勤めた。
現建物は豊臣秀頼が片桐且元に造営させ
たもの。桃山時代のもの。裏にある庭園は
小堀遠州の造園という。